

第一回 Agro-Ecosystem Analysis (AESA)記録

青年海外協力隊 (ASAFAS) 生駒忠大

要旨

12/1 に Antique 州サンレミギオ町役場農業事務所に配属になり、活動が開始した。と言っても、まだデモファームの運営など自分が主体的に動く本格的な活動は始まっていない。

配属先では、同町内の4つのバラングイの農民によって形成される農民団体(4つのバラングイの頭文字を取り、“TRI BU SAN BAG Farmers Association”としている)を対象とした稲作有機栽培の技術指導プロジェクトを行なっている。このプロジェクトでは、主に開発途上国の農民を対象とし、IPM(Integrated Pest Management)を活用した農業技術の向上を狙った代表的な参加型開発手法の一つとして知られる、Agro-Ecosystem Analysis を方法論として採用していた。私の配属先である Municipal Office of Agriculturist (MOA) が現場で農民団体を主導し、Department of Agriculture (DA)、Department of Agrarian Reform (DAR) と連携して遂行している。当日はそれぞれの部署担当者も参加していた。

プロジェクトは、2017年10月10日-2018年1月31日のほぼ米一作期間にわたり、播種から収穫までの1サイクルを行政側がファシリテーター、農民が参加者という関係で進められている。毎週水曜日にターゲットの水田に集まりフィールドワーク、それから場所を移してワークショップという流れだ。対象となる農民は30人で、それが形上3グループに分けられている。栽培しているのは「Best Rice」と呼ばれる品種で、播種されたのは10/19とのこと。10/18にミミズコンポストが撒かれた。

本報告書では、12/6にオブザーバーとして参加した際のことをまとめる。



【現場で行われる Agro-Ecosystem Analysis の流れと様子】

2017年12月6日

曇り（早朝まで雨）

7:00

ターゲット圃場に到着。到着した際、既に C/P と 2 名の農民が水田に入り、水稻に付着した益虫・害虫の観察や捕虫網を用いた捕虫を開始していた。

早朝 6-8 時に圃場に赴き、まず時刻と天気を記録した後、葉の枚数や背丈、水嵩、虫の種類と個体数等目につくことを観察し記録する。虫は、水田の土手から最低 2 m 離れた圃場内で、DA が作成したハンドブックを参考に益虫と害虫の判別をし、稲の上部、中部、下部に分けて記録する。日中、虫は酷暑を避け水田の外または地中に移動してしまい、量的な正確性が低下するため、観察は 6 時過ぎに行うのが理想的。水田には 10 数本のポールが打っており、グループごとに担当が決められている。

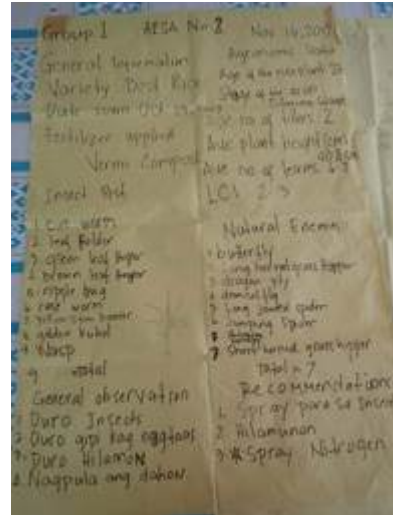
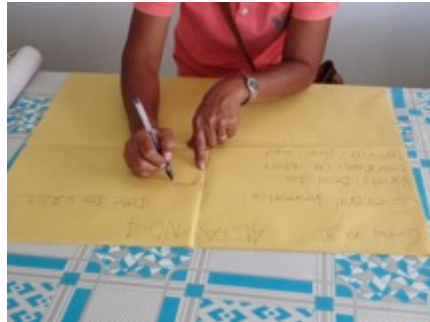


この時点での参加者は 5・6 名程度。C/P は彼らをアクティブな農家だと僕に説明。水田にはグループごとの担当を明確にするためのポールは打たれているが、それぞれの観察対象の明確な範囲が決められていないため、虫の個体数をカウントしてもほぼ意味がない。また、DA が作成した虫の同定に使用する参考冊子は行政側の人間だけが所有している。農家は計測したものや観察したことをノートに記入しない。

8:30

バランガイの集会所へ移動し、ディスカッションに向けた準備。

グループごとに観察した結果を模造紙に記入する。稲の品種、播種された日、背丈、葉の枚数等を記載し、地上部の水稻全体の絵とその周りに害虫・益虫の種類と数を記載する。



実際に模造紙の作成に当たる人は朝のフィールドワークに来ていない人が 2/3 だった。多少は実際に圃場に来た人に様子を聞きながらも、大半は先週の作成物を参考にし、ほぼそれをコピーするように今回の模造紙に記入していた。また、模造紙作成にあたってのグループ内でのコミュニケーションはほとんどなく、観察したこと、現状の問題点、それに対する考えられる解決法などは完全に一人の独断になっている。実際に圃場で観察していないのに絵を描こうとするので、実物とはかけ離れた稲が模造紙に描かれる。



9:30

グループ代表による発表と意見交換

全員が広場に集まり、3つのグループの代表が前で模造紙に記入したことを説明する。発表終了後、MOA スタッフからコメントや指摘がある。



3名の代表者による発表であるが、2/3 は模造紙作成時にその場にいなかった人によるものだった。

3つの発表に共通していたのは、水田が水不足であるということ、害虫が多いため有機農薬の散布が必要だということ。害虫対策を目的とする有機農薬としてここで強く認識されているのは生姜やニンニクを主成分とする OHN (Oriental Herbal Nutrients) と呼ばれるもの。各グループ共通して”spray”という単語を何度も発言していた。

これに対し、MOA のスタッフは、生育 45 日までは OHN の使用をすべきでないと指導が入った。

この時点になると人数が増え、30 人前後は着席していた。

10:50

害虫と益虫の特性について MOA のスタッフが写真付き資料と稲のサンプルを使ってレクチャー。10 時過ぎにはスナックが参加者に配られる。



	各グループの発表が終わると MOA のスタッフによる説明があるが、コンテンツは毎回違うよう。
--	--